

カメラマン 松本かおり

撮影 / Ju Junyong

ラグビーに魅せられて。

「専修に入らなかったらラグビーにも出会わなかった」。大学時代にのめり込んだスポーツの取材。そして知った写真の楽しさ、ラグビーの魅力。あの頃的情熱を今も胸に、シャッターを切る。

雑誌『ラグビーマガジン』のページを繰る。躍動感あふれる写真が誌面を飾る。「松本かおり」のクレジットがそこにある。

松本さんの主戦場はラグビー場だ。ワールドカップからトップリーグ、大学生、高校生の試合まで、小柄な体に大きなカメラを持ってグラウンド脇を走る。

「決定的場面を逃さないために、試合の状況を見ながらベストポジションを探してシャッターを切っています。どこに立つかが大切。動けるのが自分のウリだと思っています」

1枚の写真からもらった勇氣

中学からバスケットボールに打ち込み、高校は都

Profile まつもと かおり

1987年広島生まれ、東京育ち。2006年都立駒場高校卒、2010年専修大学文学部卒。ベースボール・マガジン社『ラグビーマガジン』編集部で編集補助を経て、フリーカメラマンに。大学時代は「専大スポーツ」編集部の編集長としてフリーマガジン『専Sation』を創刊。川上隆志ゼミでは雑誌作りを学んだ。

内の強豪校に進学。しかし、トップレベルの選手が集まるなか、「練習についていくのがやっとだった」。高校時代、公式戦の出場はゼロ。何度も心が挫けそうになった。でも、その都度、1枚の写真に救われた。「中学校時代に自分のプレーする姿をチームメイトの親が撮ってプレゼントしてくれたものです。自分がすごく上手そうに見えて、見るとまた頑張ろうって勇気づけられました」

専大では大学発行の新聞『ニュース専修』のスポーツ面の取材をする「専大スポーツ」編集部に所属した。「自分も人を元気づけられる写真が撮りたい」という思いがあった。

担当したラグビー部は当時2部リーグ。そのため紙面で取り上げられることは多くはない。だが、そ



↑昨年9月24日、関東大学リーグ戦第2戦、専大ラグビー部が法政大学に29年ぶりの勝利。このシーズン、3年ぶりに一部復帰を果たす。撮影／松本かおり



↑大学時代、「専大スポーツ」編集部の仲間と（中央）

れでもほとんどの試合、そして合宿にも同行した。

「部員も当時の榎本邦夫監督（S53 商卒）も私を仲間として受け入れてくれて、すごく密接にラグビー部に関わりました。納会では自分が撮った写真を全員にプレゼントして、それがすごく喜ばれて。写真を撮って喜んでもらえることが生きがいのように感じられました」

周りに助けられて

卒業が近づく2月、ラグビー部OBと試合観戦しながら、卒業してからは学生時代のようにラグビーと関われなくなるのが寂しいといったことを話していた。すると、その人はその場で『ラグビーマガジン』編集部の知人に電話を掛けてくれた。ちょうどアルバイトの空きがあるということだった。

憧れていた編集部だ。迷いはなかった。決まっていた内定を辞退し、『ラグビーマガジン』編集部に行くことに決めた。

編集補助のアルバイトは、最初は毎日というわけでもなく、月のうち10日ほどの勤務。仕事がなく家で過ごす日は、将来を不安に思うこともあった。

仕事を覚えていくと、徐々に勤務日数も増えた。取材にも同行させてもらうようになり、そこで撮った写真が、少しずつ使われるようになっていった。そして、1年ほど経ったころ、「カメラマンとして

やっていきたい」と宣言した。

新人であろうと「プロ」として仕事を受けた以上、失敗は許されない。

「覚悟を決めたことで、腕が上がったと思います」

がむしゃらだった。撮影機材の扱い方、現場での立ち回り方、他のカメラマンの技を真似て、分からないことがあれば率直に教えるを請うた。そして、師と仰ぐ人にも出会った。

「自分の技術を惜しみなく教えてくれました。ライバルにもならないと思ったからかもしれませんが（笑）。厳しいことも言われて、ときどきへこたれることもありますけど、でもそこで終わりません」

真っ直ぐで一生懸命。だからこそ周りは手を差し伸べてくれたのだろう。

今しかない瞬間を伝えたい

選手たちが対戦相手に払う敬意。自国やひいきのチームだけでなく、試合そのものを楽しもうとする観客の姿勢など、そういうラグビーの精神や文化に強く惹かれるという。

「2015年にワールドカップ・イングランド大会を取材したときは、スタジアムへ向かう観客の楽しそうな様子や、スタンドで高齢者から若者まで、ほくほくした顔で試合を待つ姿などその雰囲気さがすごくいいなと思いました。試合だけでなく、そういう写真もたくさん撮りました」

今年、ワールドカップが日本で開催される。俄然ラグビーの注目度が高まるなか、松本さんの忙しくも充実した日々が続く。

「ワールドカップはやはり別もの。選手にとっても、カメラマンにとっても特別な舞台。そこでいい写真を撮りたいのはもちろんです。でもそういった歴史的瞬間だけでなく、一つ一つの取材を大切に。その瞬間しか見られない選手の表情やその場の空気を伝えられるような写真を撮っていききたいです」